

平成31年4月1日

平成31年度 学校経営方針

小平市立上宿小学校
校長 瀬戸敬

学校の教育目標

<教育目標>

- ◎やさしい子～豊かな人間性～相手の心情を考える優しさと連帯性の育成
- かしこい子～確かな学力～豊かな情操に支えられた創造的思考力の育成
- がんばる子～たくましさ～ねばり強く追求する意志力の育成
- じょうぶな子～健康・体力～心身ともに健康で前向きに生きる力の育成

めざす学校像・教師像・児童像

【めざす学校像】

学校は、生きる力を育み、人間の健全なる成長を促す場である。小学校はその基礎・基本を身に付ける場である。知・徳・体のバランスのとれた教育活動を行う。

自分の「居場所」を共に創り合い、共尊感情を高める学校づくりを行う。

- (1) 児童・教職員・保護者など学校に集う一人一人が生き生きと輝く学校づくりに努める。
- (2) いじめがなく、不登校児のいない学校をめざし、思いやりと生きていく強さやたくましさをもった児童が満ちあふれている。
- (3) 保護者・地域から信頼を得るため、情報発信、学校公開を積極的に行い、開かれた学校を作る。
- (4) 学校・家庭・地域が共に力を合わせ、児童の健全育成を図る。

【めざす教師像】

- (1) 児童の自立心を重んじ、愛情をもちながら、心のこもった指導ができる教師。
- (2) わかる楽しい授業力を身に付け、授業を通して児童・保護者の信頼を得るということを認識し、絶えず授業の工夫・改善に努める教師。
- (3) いじめ・不登校をつくらない人権尊重や協働の精神を大切にする学級経営力をもつ教師。
- (4) 積極的に児童・保護者理解を深め、一人一人の児童や保護者へ誠実な対応に努める教師。
- (5) 逆境にも負けない強くたくましい教師。

【めざす児童像】

- (1) 逆境にも負けない強くたくましい子
- (2) 相手の立場を考え、心を通わせ、互いに支え合う子
- (3) よく考え、意欲的に学習に取り組む子

今年度の取り組み目標と重点的・具体的な実施内容・方法

☆新学習指導要領の主旨を踏まえ、すべての教育指導計画を見直し、教員研修を進めながら、校内研究のテーマにも位置付けて指導改善をを行う。特に、外国語活動におけるコミュニケーション能力の育成を行う。

以前から取り組んできた共尊感情を高める取組は継続させる。

☆新教育課程のスムーズな移行を全教職員で行う。

1. 授業力の向上（学力向上）

(1) 新学習指導要領の主旨を踏まえ、主体的で対話的な深い学びの実践を図る。

○道徳や外国語（活動）、プログラミング教育の研修・研究を充実させ、授業力の向上を図る。

(2) 特別支援教育の視点を生かし（「こだいらこれだけは」の徹底）、どの子にもわかる授業（「わからない0」）を心がけ、学習に対する児童の意欲を高める。

○児童が意欲的に取り組めるような教材、授業の進め方を工夫する。

○「ほめる」「認める」を重点に配慮を要する児童に効果的な関わりをもち、指導・相談・支援を積極的・効果的に行う。

(3) 東京ベーシックドリルを活用した毎週水曜日朝の「上宿タイム」を確実にを行い、朝学習の時間やぐんぐんタイムの時間も学力向上の有効な時間とする。

(4) 教師自身の授業力の向上を図る。

○単元全体を見通したきめ細かい教材分析・研究に取り組み、児童が意欲的に取り組む授業の展開を工夫する。

○お互いが、公開授業や模擬授業に積極的に取り組み、教師相互の研修を通して授業力の向上を図る。

(5) 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、オリンピック・パラリンピック教育を推進し、「楽しみながら運動プログラム」を活用しながら、日常的な体力向上を図り、地域行事とも連携しながら、「運動嫌い0」を目指す。

(6) 外国語（活動）の学習を通して、異文化理解教育も推進しながら、コミュニケーション能力の育成を図る。

2. 学級経営力の向上

(1) 学級経営方針を明らかにして、児童・保護者対応を丁寧に行う。

○学級担任としての方針を児童・保護者に明確に示す。

○学級の問題が起きた時は、個人だけで解決しようとしなない。

○児童対応は、場面に応じて指導・相談・支援を使い分けて行う。

○「信頼できる大人に相談」する環境をつくる。

○無視しない、指導してくれる先生であることを大切にする。

○特別支援の提案は特別支援コーディネーターかスクールカウンセラーが行う（担任が直接しない）。

○集中することを大切にしながら、めりはりのある指導を行う。

○保護者の信頼を得るために、学級通信による積極的な情報発信を定期的に行う。

- (2) 「いじめ0」を達成するために自他を大切にすることを育て、人権意識に基づいた規範意識を高めるとともに、基本的な生活習慣を身に付けさせる。
- 学校全体で、上宿小スタンダードを追究し、基本的な学習と生活のルール、学級・学年のルールを確認し、指導の徹底を図る。
 - 基本的な生活習慣については、児童の実態を調べ、必要に応じた具体策を講じる。
- (3) 気持ちのよい元気なあいさつと、相手の気持ちを考えた優しい言葉づかいができるようにする。
- 「気持ちのよいあいさつ」や「ありがとう」等の感謝の言葉、「ほめる」言葉かけ等を、年間を通した取り組み目標にし、教師から積極的に声かけをする。
 - 生活指導部を中心に、あいさつ運動等の具体的な取り組みを行う。

3. 人材育成の組織づくり トップダウン+ボトムアップ+チームワーク

- (1) トップダウンシステムの確立（主幹・主任層の育成）
- 主幹教諭や主任教諭、主任教諭候補者の育成を指導体制改善の柱とする。
 - 主任層は学校運営に関する具体的な取り組みを提案する。
 - 若手教員の指導に関して主幹教諭・主任教諭が指導を多く行うようにする。
- (2) ボトムアップの積極的導入
- 学年会・低中高ブロック会（含む専科）を充実させる。
 - 主任層は、若手教員育成の具体的な方法や具体的な指導内容を提案する。
- (3) チームワークの重要性（「チーム上宿小」として）
- 組織が一つになって、各人材と関係諸機関と協力しながら学校教育活動を行う。
 - 生活科や総合的な学習の時間、各種行事、地域行事を通して、教職員の協働の意識を高め、仕事に対して成就感がもてるようにする。
 - 自分だけよければいいという発想ではなく、時には分掌を越えて助け合いながら、悩みも共有し、お互いのメンタルヘルスに留意し励まし合いながら仕事に臨む。

4. 保護者・地域から信頼される学校づくり

- (1) 保護者等の相談に誠実に対応し、解決を図る。
- 児童一人一人の実態を把握し、具体的な解決・改善の方途を探り、迅速・適切に対応する。連絡をするか迷った場合は迷わず連絡する。
 - 問題行動等については、速やかに把握・対応し、児童に適切な指導を行うとともに、必要に応じて保護者への連絡・面談等を適切に行う。
- (2) 家庭での自主的な学習と読書活動の強化を図る。
- 自主的な学習を促す「自主学習」を家庭学習に位置付ける。
 - 読書をしない子や図書室に行かない子への対策を強化する。
- (3) 地域の教育力を広く求め、学びでつながる教育活動に生かす。
- 青少対やクラス委員、放課後子ども教室の活動と連携し、地域のボランティアやゲストティーチャーを積極的に活用して学校教育の向上に生かす。
- (4) 小・中連携を進める。
- 小学校から中学校への教育活動の移動をスムーズに行うために、特に外国語の学習を通して、中学校との連携を深める。
- (5) 開校40周年関連の取組を通して、地域とのつながりを強化し、愛校心を培う。

5. その他

(1) 危機管理意識を高め、危機に対する対応力を育成する。

○敏速で誠意のある丁寧な対応に心がける。

○一人で問題を抱えず、周りの教員や管理職に事実を報告しながら、取り組む。

○事案に対して、相連報記（そうれんほうき）で行う。

まず、事実についてその対応を相談する。「どうしたらいいですか」ではなく「こうしたいんですがどうですか」その上で関係者に連絡を取り、結果を報告する。その際、記録をしっかりと取っていく。

○安全管理を徹底する。

・安全教育（生活・交通・災害）を推進する。特に交通安全の徹底。

・児童の安全な避難方法や災害の回避手段など、逐次検討する。

・避難所としての学校の機能を全教職員で再確認し、マニュアルの作成をする。

・小平市総合防災訓練を通して、防災意識を高める防災教育を行う。

○サービス事故を絶対に起こさないという決意をもち、市民からの信頼を得る。

・研修会を随時行い、日常的にサービス事故情報を伝え、サービス事故の防止に努める。

・児童の安全管理や個人情報等の管理、教職員の意識を高める取り組みをする。

・児童の自主性を重んじ、暴言・脅し・暴力などを指導の手段としない。

(2) 学校予算に対する税としての意識を高め、予算の執行や事務処理等を適正に行うようにする。

○お金は湯水のようにわき出てくるものではないということを意識させ、予算の計画的な執行、学級・学年等の適切な予算執行等について、適切に行う。

○予算執行の見直しを随時行い、無駄を省き、再利用・再資源化を徹底する。

○研究予算を有効に活用し、校内研究や校内環境の充実を図る。

(3) 「勤務時間で勝負」を合言葉に、副校長の校務軽減と並行しながら教職員の校務改善も積極的に進め、校内で取り組む上宿小独自の働き方改革を創意工夫し実行する。

○経営支援部に働き方改革校内委員会の機能ももたせ、具体的な改善策を提案していく。

○高学年担任の校務の分担（質や数）を減らし、軽減を図る。

※ただし、機械的に担当を決めるのではなく、適材適所や効率等を考慮する。

○二部会の分掌決定の際には、学年内ではなく、ブロック内での調整も可とする。

○スクールサポートスタッフの仕事内容を明確化して、効果的な活用をする。